

遠巷說百物語

遠巷説百物語◆目録

●	●	●	●	●	●
出	恙	鬼	波	磯	菌
世					黒べつたり
螺	虫	熊	山	撫	
四六一	三七一	二七九	一八七	九七	五





◎齒黒べつたり

◎齒黒べつたり――

或人古き社の前を通りしに
うつらかなる女の伏拜み居たれば戯れ云て
過んとせしに
彼女の振むきたる顔を見れば
目鼻なく口斗り大きくて
げら／＼と笑ひしかほ
二目と見るべきやうもなし

――繪本百物語／卷第三・第廿三
桃山人・竹原春泉／天保十二年

譚

昔、あつたずもな。

ある処に、長者殿が居たつたずもな。

その息子あ独り身で、嫁つこ探してらつたずもな。

その時分、釜石さ行ぐのに越える笛吹峠づう峠の下辺りに貧乏な百姓家が一軒あって、それはそれは美すう双子の姉妹まりあ暮らしておつたずもな。

姉つこのほうは怪気深えわがままな娘で、妹のほうは正直者のよく稼ぐ娘であつたと。

二人とも、年頃さなつて、益々美すな娘つこになつたずもな。

長者の息子あ釜石さ用足すに出掛けた時、この妹のほうあ見初めてすまつたずもな。息子あもう、寝ても醒めても娘つこが忘れられねぐなつたずもな。

なんとかかすでえと思つて、息子ああの手この手で云い寄つてみだつと。

そのうち、妹娘もその気になつて、その秋に祝言挙げることが決まつたずもな。

ところが、田圃の稲穂が垂れる前に、娘つこあ居ねぐなつてしまつたんだと。

前前から娘つこに惚れておつた、松崎の天狗森に住まう天狗殿に攫われてしまつたずもな。

息子あ嘆き悲しんだと。

息子あ泣いではかりいらずども、長者殿が見兼ねで、

「なら嫁は姉つこでも良かべ。同じ顔だべ」

と言つたずもな。

息子あ聞いた時は魂消たずも、慥かに同じ顔だもの構わねがど思い直して、姉つこさ嫁に娶つたど。

さで嬢にしでみつと、息子、また天狗さあに獲られるんねえがと心配になつて、家の奥に頑丈で立派な座敷拵えで、そこさ嫁つこ入れで外さ出さねえようにして、上膳据膳で大切に大切にしたど。

だども、この嫁つこ、元がらわがままであつたてえば、まんつ家のこと何も為ねで、あれ欲し、これ欲し、あれ喰いでこれ喰いでと、贅沢の限りを尽したど。

お蔭で長者の家、わらわらど傾いてしまつて、そしてるうづに長者殿も病みついてらつたずもな。

そんでも嫁つこあ心根改めることしねで、わがまましてだんだと。

そんだらば、ある時、嫁つこの顔あべろつと、目も鼻もなぐなつてしまつたずもな。息子でえ、その顔見で、

「俺が嫁つこの顔、なぐなつてすまつた」

つて慌てで、家の中、隅隅まで捜したずも、目も鼻も何処にも落ちでなかつたど。

目つこも見えね臭いも嗅げねでえ嫁つこも困つて、氏神様に三十七十一日願掛けで、性根え直す、正直に稼ぐて誓つたらば、そのうち顔は戻つたずもが、曲がつた性根は直つたものの、戻つた顔は醜くなつてつたど。

どんどはれ。

咄 はなし

天^{そら}がやけに蒼^{あお}い。

北^{ほく}国の空は無色陰鬱^{いんうつ}という心緒^{しんしよ}を抱^{かか}きがちであるが、そんなことはない。この辺りの夏空は

藍^{あい}玉でもぶちまけたかのような色になる。その鮮烈^{せんれつ}さは清^{すが}清^{すが}しきを通^{とお}り越^こし、眼^めを細^{こま}めずには

居^ゐられない程に強い。他所^{よそ}から来た者などは暑い時期になると辟^{へき}易^{えき}する程であるのだが、今年

は蒼^{あお}くなるのが一段と早い。

暦^{れき}の上では未^まだ春である。

往来^{わらい}は物^{もの}凄^{すご}い活気である。人と馬^{うま}が連^つなつて犇^{ひし}めき合^あつてゐる。その熱^{ねつ}氣^きが氣^き温^{おん}まで上^あげて

しまうものか、初夏^{しゅな}を思^{おも}わせる陽^{やう}氣^きである。

市^{いち}が立^たつてゐる。

毎月^{毎月}、一の付^つく日には市^{いち}が立^たつ。近郷近在^{きんきょうきんざい}から数^{かず}え切^きれない人^{ひと}が出^でる。

海^{かい}のものと山^{さん}のもの、町^{まち}のもの、遠^{とほ}くのもの土地^{ちど}のもの、有^ありと凡^{およ}百^{ひゃく}品^{ひん}物^{ぶつ}がこの町^{まち}に集^{あつ}ま

る。馬^{うま}と人^{ひと}が群^{ぐん}がり居^ゐ並^{なら}び、それはもう賑^{にぎ}やかだ。

活^{かつ}氣^きがあるのは好^{この}ましいことである。

でも。

宇^う夫^ぶ方^{かた}祥^{しょう}五^ご郎^{ろう}は、人^{ひと}混^まみを好^{この}まない。

人^{ひと}混^まみというよりも市^{いち}が余^あり好^{この}きではない。

煩^{わづ}瑣^さいのは一向^{いっこう}に構^{かま}わぬが、臭^{にお}氣^きが我^{われ}慢^{まん}ならぬ。

生^{せい}臭^{くさ}さや青^{せい}臭^{くさ}さ、木^きの香^かり鉄^{てつ}の香^かり、埃^{ほこり}や汗^{あせ}の匂^{にお}いが代^かわる代^かわる、時^{とき}に渾^{こん}然^{ぜん}一^{いつ}体^{たい}となつて

鼻^{はな}を突^つく。

時^{とき}に馬^{うま}糞^{ふん}なども臭^{にお}う。

勿^{もちろん}論^{ろん}、平^{へい}素^そより常^{じょう}に様^{よう}々な匂^{にお}いはしてゐる訳^{わけ}で、無^む臭^{くさ}の場^ば所^{じょ}などある訳^{わけ}はないのだが、海^{かい}に

は海^{かい}の、山^{さん}には山^{さん}の、里^{さと}には里^{さと}の匂^{にお}いがあることだけは間^ま違^{ちが}ひない。

山^{さん}で磯^{いそ}の香^かが馨^{かお}るのは変^{へん}だし、船^{ふね}上^{うへ}に花^{はな}の香^かが漂^{ひら}うのも妙^{せう}である。

市^{いち}には何^{なに}もかもがある。

だから何^{なに}もかもが匂^{にお}う。

祥^{しょう}五^ご郎^{ろう}は江^え戸^どで一^{いち}年^{ねん}ばかり暮^くらしたことがある。江^え戸^どは水^{みづ}の匂^{にお}いがした。江^え戸^どは人^{ひと}も多いし物^{もの}も多い。こんな鄙^{いなか}など比^ひべ物^{ぶつ}にならぬ程に多い。だが、それでも水^{みづ}の匂^{にお}いが勝^{かち}つ。水^{みづ}捌^はけも悪^{わる}く、水^{みづ}路^ろで区^く切^きられてゐるからだろう。

遠^{とほ}野^の保^ぼも、豊^{とよ}かな水^{みづ}系^{けい}に恵^{めぐ}まれてゐる。

立^た派^{はい}な川^{がは}もあるし、池^ち沼^{しやう}も数^{かず}え切^きれぬ程にある。

川^{がは}の流れは速^{はや}く、水^{みづ}は清^{せい}冽^{れつ}で、水^{みづ}量^{りやう}もまた多い。

そもそも、太古の頃この辺り一帯は湖だったと伝えられている。実際、この土地は陰しく深い山に囲まれた窪地であるから、そうだったのだろう。それが如何にして干上がったものか祥五郎は知らぬし、また知りようもないのだが、少なくとも人が、人の手で水を抜いた訳ではあるまい。水は川となって流れ出たのだ。

それでも里や町まで水の匂いがあることはない。川は川、湖は湖だ。川に行けば川の匂いがあるし、湖に行けば湖の匂いがあるだけである。

江戸は、平地を堀で刻み水場を埋めて造った土地だ。遠野保は、天然自然の地形のままだ。その差なのかもしれぬ。

この土地は、在るがままに有るのだ。

だからこそ、ごちゃごちゃとした雑多な匂いが鼻に付くのだと祥五郎は考える。町が賑わうのは良いことだが、この雑踏のただ中に身を置くことだけは、祥五郎には些かきつい。

気付けば直ぐ横に馬の横腹がある。

馬はこの辺りの人人の生活には欠かせないものだから、いつだって、何処にだっている。直接馬と関わらない身分の祥五郎でも、目にしない日はない。それでもこんな近くに身を寄せることはない。乗ることなども先ずない。

馬の匂いに辟易して離れようとしたら人につかった。

人混みを避けるように裏道に抜け、空を見上げた。

蒼い。

こんな色になるのは少し早過ぎる。

年明けからこつち、随分と陽気が良い。昨年に続き今年も豊作だと百姓達は喜んでいる。漁の方も調子が良い。獲った魚の置き場がないくらいだと聞く。悪いことではない。大いに喜ばしいことだろう。

しかし、銭がない。

ここ数年、市場に流れる銭が不足しているのだ。

それでも魚はどんどん遠野に入って来る。品が余っているから値の方はずると下落して大変に安い。一方、干物などを含む俵物には昨年から新しく役銭の課税が施行されている。こちらの値は上がった。いずれ仕方がないことではある。というものの、町の者は皆、困惑しているようである。

遠野の民は魚ばかり喰っている。

それでも、飢饉よりはずっと良いと祥五郎は思う。

喰うものがあるだけマシである。物の値段が下がるのも、悪いことではない。だが幾ら廉くなっても、銭そのものが不足しているのであるからこれは仕方がない。

金がないのは民草だけではない。藩政もまた、窮乏を極めている。

天保の時代は凶作が続き、物の値は高騰し、一揆も起きた。

大きな声では言えないが、凡ては藩の施策が悪かったのだと祥五郎は考えている。作物の出来不出来は藩の所為ではないが、困った時に備えることこそが政の要ではあるだろう。

ここ数年は豊作と平年作が続いているが、銭は相変わらずない。諸藩士から借り上げたり町方から御用金を供出させたりしても足りるものではない。

そもそも、銅不足は国全体の問題で、盛岡藩だけの問題ではないのだ。

この状況下で凶作となれば、幾ら魚が獲れても民の暮らしは成り立たなくなるだろう。だが、気候ばかりは読み切れるものではないのだ。

祥五郎は漠然と不安になる。

裏道を抜け、幾分遠回りをして松崎まで出た。

船瀬不動尊堂の裏手に乙蔵が待っている筈だった。

乙蔵は土淵村の豪農の倅なのだが、野良仕事を嫌い、彼れ此れと考えを巡らしては新しい世を始め、その度に失敗ばかりしていると云う困った男だ。

ただ、世事には通じている。民譚から杜寺の縁起、咒や謂い伝えまで虚実の境なく何でも知っているし、武家の秘め事商家の醜聞、近郷近在の噂話から役に立たぬ些事まで耳に入らぬものはないと豪語している。便利といえば便利な男だ。

齢は祥五郎より三つ四つ下だから、二十三だと思うけれども、十は老けて見える。乙蔵に言わせると苦労知らずの祥五郎が童顔だということになるのだが、どう欲目に見ても乙蔵が齢相応の容貌とは思えない。

老け顔の町人は古い切り株に腰を下ろし、竹筒に入った何かを飲んでいた。当然、水ではないだろう。

「おや」

顔を向ける。

「遅え。帰るどこだった」

「済まぬ」

浮がねえ貌だたと乙蔵は言う。

「市が立つ日は大体そんな面だ。御譚調掛様ア民の暮らし振りを憂えておるかい」

「混雑が苦手なだけだ」

その役名を口に出すなと祥五郎は言う。

「そんな役はないのだ」

事実上、祥五郎は無役である。盛岡藩にそんな名の役職はない。だから名目上は浪士と変わりがない。

遠野保は、鍋倉城の城下町である。

城下町といってもお城に藩主様が御坐す訳ではない。藩主の居城は盛岡城である。従って慶長の後に一国一城令が敷かれて以降は、城ではなく館と称するが正しいのだろう。書面上は要害屋敷となっていると聞く。だが名目上はどうであれ城の形をしているのだから、城なのだ。

民百姓は皆、城と呼ぶ。

それもその筈で、この要害はその昔阿曾沼氏が築いた、横田城という歴とした城郭なのである。阿曾沼氏は滅んだが、城は破却されずに南部家のものとなったのだ。

遠野保は隣藩領との国境でもあり、交易の要所でもある。金坑もある。疎かには出来ぬ。

一時期は奉行などを城代として置いていたようだが、あまり巧くは治められず、治安は乱れたという。そこで盛岡藩は、寛永の頃に藩主の本家筋であり南部御三家筆頭でもある八戸南部家を独自の裁量権を与える形でこの要害に移封したのだ。八戸南部家はそれ以降遠野南部家となり、横田城は改築されて鍋倉城となったのである。

だから城なのだ。

今の城主は遠野南部家三十二世、南部義晋様である。

義晋様が跡目を継がれたのは七年前、当時まだ二十歳という若きであった。若いとはいえず氣溢れる威丈夫で、性格も豪放磊落、家臣一同も遠野の民も、この若殿に大いに信頼を寄せている。

ただ、遠野南部家当主は、世襲で盛岡藩筆頭家老職に就くことになっている。

筆頭家老は盛岡城常勤である。鍋倉城の城主は、城中にはいらつしやらないのである。

義晋様は筆頭家老として難題山積の藩政に携わりつつ、鍋倉要害の支配として遠野のことも氣に懸けねばならないのであった。

祥五郎は義晋様と同じ年である。

十の砌より三十二世を嗣がれるまでの十年間、側衆としてお仕えした。

家老職に就かれた際、祥五郎は義晋様直直に呼び出され命を受けたのであった。自分の目となり耳となつて遠野保の民草の動向を見極め、逐一報告せよ——と。

武家、商人、百姓、工人、猟師、漁師——遠野保には様々な人が住まう。

加えて奥州でも指折りの交易場であるから、諸国の者も集う。咄が生まれ噺が集まる。遠野保には、ハナシが溢れている。

そうした巷に流れるハナシを逐一聞き付け、真偽を見届け見定め、悉く報せよという令であつた。

御譚調掛というのも、適当な呼称である。

盛岡藩筆頭家老直属の御役ではあるのだが、そんな役儀は公式にはないのである。殿様直直の命を受けているとはいふものの、記録の上での祥五郎は藩士ですらなく、浪浪の身ということになっている。

知つたこつちやねえと乙蔵は言つた。

「お前は殿様の手下のお侍様だべ。偉え。俺あただの破落戸だから」

お前はゴンボじゃないだろうと祥五郎は笑う。

「あのな、ゴンボというのはもつと乱暴なものだ。お前は幼童の頃より腕っ節は弱いし度胸もないぞ。喧嘩もせんではないか」

「まあなあ」

人と同じことをするのが嫌いなだけであろうと言つて祥五郎は笑つた。能く知つとるなあと乙蔵も笑つた。

「臍曲がりなのだわ」

「大いに曲がつておろう。そもそも、先だつて始めた煮売り屋というのは上手く行つておるのか」

尋いてくれるなと乙蔵は言う。

「駄目か」

「言いだぐね。言わずとも知つとる癖に。そうでなければ馬千匹人千人の市の立づ日にお前と会つたりはしねべ」

咄イ買つてける酔狂者などお殿様のお偉え手下様ぐれえしか居ねべと乙蔵は苦笑いする。

「あのな、乙よ。儂のことを殿直直の命を受けた手下というならば、だ。その仕事を手伝うておるお前とても同じことではないか。殿はお前のこともご存じなのだし、お前に渡しておる手間賃も南部弥六郎様の懐からおるのだぞ」

遠野南部家の当主は、初代となる弥六郎の名を嗣ぐのが決まりである。

「儂も士分とはいえ浪浪の身。謂わば同役だ」

「いや、俺は駄賃付けの馬みでえなものよ。馬あ曳ぐのはお前だわ、祥五郎」

「で——」

その馬殿は何を運んで来てくれたのかなと言つて、祥五郎は乙蔵の隣に腰を下ろした。

「座敷童衆を見だ」

「見ただと。お前がか」

この眼でなあと乙蔵は己が眼を指差した。

「祥五郎お前、餅屋の山田屋を知つとるな」

「遠野南部家御用達の御菓子司山田屋ならば存じておるがな」

「遠野に菓子屋なんぞ何軒もなかべ。その山田屋だ。彼処は大層な身代だが、多分、もう駄目だべな」

「山田屋から座敷童衆が離れたというのか」

「そんだ」

出で行つたと乙蔵は答えた。

「そう言われても俄には信じ難いな。お前を信用しない訳ではないが、一体何が出て行つたと言うのだ。話には聞くけれど、儂はそんなもの見たことがない。まあ、天狗だ鬼だも見たことはないがな。それらと同じで、実際に、居るものであろうかい」

「いるさ」

座敷童衆とは、この辺りに伝わる霊である。家運が傾くとその家から抜け出て何処かに行くのだと謂われている。童衆と謂うくらいだから、大抵は子供の姿をしているらしい。顔が赤いという話も聞く。この辺りで顔が赤いというなら、川童か天狗であろう。

否、実際そうした妖物と然う違うモノではなからうとも祥五郎は思っている。

没落した家からそれが出て行つたという話はまま耳にするが、皆後付けである。稀に零落れる前に謂われる場合もあるようだが、それは家運の傾く兆候を察して流布されるものだ。そうした言説が流れるということは、既に不幸の種は芽を吹いているということなのだろう。

最近では、それがやって来たから裕福になったのだという与太咄まで囁かれるようになって
いるらしいが、それは拵え話だ。妬みやら嫉みやら、羨望やら、人の世には面倒な想いが色々
とあるのだ。そうした蟠りを人ならぬモノに仮託するのだろうと、祥五郎は判じている。

その方が何に付け穩当に済むからだ。

富や財は、才覚やら尽力やらで得るものと祥五郎は考える。

運も全くないとはいわないが、運を呼び込むのも日目の精進故であろう。成功にも失敗にも
必ず理由はある。特に失敗の場合、そうなった子細は明白である。

それを、認めたくないのだ。

人は。

そうすると。

「山田屋に何かあったか」

「何かあったかつて、だがら出で行ったのを見だと言うてるでねえが。ありや座敷童衆だわ」
顔が赤かったかと尋くと、乙蔵は真っ白だったと答えた。

「白いのか。なら山人ではないか」

「あれはでがいんだべ。俺が見だしたのは小せえの。童だ。十三三の、切り髪の小娘だ」

真っ赤な振り袖着でなあ。

ふんわりふんわり。

髪を靡かせでな。

そう言つて乙蔵は遠くを視るような顔をした。

「おい。大丈夫か乙よ」

「抜げるように色の白え、めんこい女子童であつたわ」

「親戚の娘でも来ていたのではないのか」

「山田屋にそんな親戚は居ねわ。隠居した仁右衛門の息子は弥右衛門だけだ。仁右衛門は上方
から流れで来た男で、この辺りに縁者は居らね。先だって死んだ嬢のお勝は土淵の出だが、血
縁で生き残つてるのは嫁いだ妹だけだし、そごにも女の童は居ねわ」

「慥か、先頃祝言を挙げただろう。息子が」

「ああ。青笹辺りの一つ家の娘とな」

「そつちの親類じゃないのか」

「違うな。あれは、姉妹二人暮らしで、姉の方はもう居ね」

「居ないというと、何処か他所へ嫁いだのか」

攫われたと乙蔵は言つた。

「何だと」

「まあ、神隠しだべ。山男か天狗様か知らねけどな。妹の祝言の日に居なぐなつた。まあ、そ
れがケチの付き始めだべ」

「ケチ——か」

そうした不幸を兆しと見るのだ。

「他に何があった」

「他とは何だ」

「当然何かがあったのだろう。その、座敷童衆が出て行つたなら――」

山田屋は京風の練り菓子を作る、陸奥では殆ど唯一の菓子司だろう。

前の主の仁右衛門は、都で菓子作りの修業をした男だと聞いている。遠野南部家の御用達であるのみならず、盛岡の殿様にもその菓子は折節に献上される。

仁右衛門は病み付いてるわと乙蔵は言う。

「息子が嫁御娶つてから変事が続いでな、そのうづ具合を悪くして、今あ寝だ切りだ。あの店は仁右衛門の腕で保つてだよなもんだべ。客足も減つてゐるわ。俺はあんな高級な菓子は喰わねがら判らねども、味が落ちたんだべな」

「正月の菓子は、今まで通りだったようだがな」

尤も祥五郎は喰っていない。

嫁が来たのは睦月の終わり頃だと乙蔵は言つた。

「正月なら嫁は居ねべ」

「嫁が悪いような言い種だな」

「そうは言わねけどな。でもな、この頃では弥右衛門まで疾がちだ。それに、その嫁にも何かあつたようだしな」

「何かとは何だ」

「人前に出なぐなつた。もう十日も経つわ。奥座敷に籠つておつて、奉公人も誰も、顔見でねえようだ。俺が座敷童衆を見たのも、十日前だ。矢つ張り市が立つてだがら」

「なる程な」

何かは起きているのか。

乙蔵は顔を空に向けた。

「元日が能く晴れてだから、百姓どもは今年も豊作だと喜んでたがの、俺あ怪しいと思う。天気は良いが温ぐならね。夏が寒ければ駄目だべ」

不安なことを言う。

「ま、山田屋は遠からず左前になる。殿様も新しい菓子屋を探さねばなんねべな。それから」

「まだあるか」

「なんぼでもある。話の数だけ銭こ呉るんであれば、なんぼでも話すわ」

「拵え咄はいかんぞ」

「咄い拵える程賢ぐはねえよ。無学だ。百姓の倅だ」

「ふん。お前、自分は元を辿れば新田家の血筋なのだと、いつだったか威張つておつたではないか。真実ならば八戸南部家の縁続き、殿とも遠戚ということになるうよ。儂なんぞは、滅んだ阿曾沼の家臣の、しかも傍系だ。お前の方が偉いわ」

「偉えかどうかは関係ね。お前の先祖はなんとらいう書物を沢山書いた御仁だべ。俺方にそういう才はねえ」

「先祖ではない。儂は同族だが、直系ではない」

乙蔵の言うのは宇方広隆のことである。

元禄の人で、『遠野古事記』を始め、この土地の風俗歴史などを具に書き記している。

祥五郎がこうした密命を受けたのも、どうやらその広隆が居たからだだったようなのだが、正直、関係はない。どんどんと遡って行けば何処かで交わるのだろうし、ならば全く無関係ともいえぬのだろうが、その程度のことだ。単に姓が同じというだけである。

「その、同族だかが書いた何たらいう本に、化け物のことが載っておるだろ。俺は読めねが元お城勤めの爺からそう聞いた。お前は読んでるべ」

「化け物か」

載っていたと思う。

「諳んじられる程に読み込んではおらぬがな。殿にお願いして読ませて貰ったことはある。しかし空覚えだな」

化け物というなら。

「儂が覚えているのは——光る一つ眼の禿童子やら、頭が伸びる見越し入道とかいう大坊主やら、後は鉄奨黒染の大口女やら——そういう、子供騙しのようなものばかりだがな」

それだと乙蔵は言った。

「どれだ」

「お齒黒の女だ。それが出る」

「何だつて」

「愛宕山の裾野の林の中によ、鳥居が立つとるべ」

「鳥居なんて幾らでもあるだろう。いや——愛宕山の裾野というと、山口の辺りから柏崎に向う時に通るな。あの松林の道だろうか」

「道沿いではねえ。林の中によ」

「そういえばあつたかな。いや、あれは慥か、頂上にある山神の祠へ続く参道への入り口ではなかったか」

能ぐ山ン神様と行き逢う処だと乙蔵は言った。

「其処さ出る」

「だから何がだ」

記事にあつたのは、鉄奨を付けた乱れ髪大面大口の女が夜な夜な婦女子を脅かす——というものだったと思う。

そんなものが存在するとは思えない。

「あのな、夕暮れに彼処を通るとな、人の気配がすんだ。で覗いでみると、鳥居の蔭に女が立ってるんだわ。薄暗えし遠目だべ。能ぐ見えねがら、近寄るべ。すると、それがどうも引き振り袖を着でな、高髷に、桂巻でえ姿なのよ」

「桂巻か。まるで角隠しだな。それでは花嫁御寮だ」

正に嫁つこよと乙蔵は言った。

「怪訝いべ。そんだ刻限に、あんな場所に、花嫁が独りでおる訳がね。気になるがらこう、更に見つどな、こう、すうつど振り向ぐのだな。するど」

眼も鼻もねえ。

「眼鼻がないのか」

「ねえのだど。でな、笑う」

「眼鼻がないのか。のつべらぼうなら笑えまい」

「口はあるんだべな。それが、こう——にだつと」

口の中は真つ黒である。

鉄獎が塗られているのだ。

引眉も鉄獎も、近頃は余り目にしない。年配の武家の妻女などは今もそうしているのかもしれないが、祥五郎はそうした方に会う機会を先ず持たない。

否、武家でなくとも祭りや祝言などの際には鉄獎を付けるものと聞くし、未婚でも二十歳を過ぎればそうするものだと謂うのだが、祥五郎は見た覚えがない。見てはいるのだろうか覚えていないのだろうか。尤も、大口を開けて笑いでもない限り鉄獎を付けているかどうかなど判りはしない。祝言の日に花嫁が大口を開けて大笑するというのも考え難い。

そう考えてみると、口を開けて鉄獎を見せ付けるというのは、それだけで奇異な情景ではあるのだろう。

否、それ以前に——。

「眼鼻がないというのは、有り得ぬだろう」

「有り得ねがらこそ、化け物だという話だ。七日程前から、もう十人からが見ているわ」

「十人なあ。皆、町人か」

「まあ、山口の者と柏崎の者が殆どだがな、お侍も居る。昨日だか、お城勤めのお勝手掛だかが腰拔がしたようだ」

「鍋倉の城だな。勘定方か。名は判るか」

「大久保とかいうたべかな。二本差しが狐狸妖物に出会して腰拔がすなど武門の恥と誹られて発奮して、も一度出向いで化け物は斬り伏せると息巻いでるようだ」

「大久保様か」

親しくはないが、顔は識っている。

「ま、一人二人なら兎も角も、十人からが同じこと言うのであるから、そういう姿のものが出るんだべ。狐が何かでねえかな」

「狐なあ」

狐が化かす、化けるという話は今もまま聞くが、それこそ信じ難いと祥五郎は考える。

この手の訳の解らぬモノは大抵は狐なのだ。『遠野古事記』にも狐狸の仕業と書かれていたから、元禄の昔からそうなのだろう。だが、何が起きたのであろうと狐の仕業としてしまえばそれで終いになる。しかも、何でもありということになる。

それでは祥五郎の役目は果たせない。

起きたこと、その理由、そしてそれがどう受け止められ、どのような影響を与えたか。そこまで調べ上げなければ、ハナシにはならない。狐が化かしました——と言うのなら、ほぼ凡てがその一言で済んでしまう。殿様にそんな世間話をお聞かせする訳にはいかぬ。それは治政の役には立たぬ。

大久保様あ今日も行ぐんでねがなと乙蔵は多少小馬鹿にしたように言った。

「相当、頭に血が昇つとるようだぞ」

大久保に会ってみるべきだろうか。

山田屋にも出向いてみた方が良さだろう。

その後、海産物の値段がまたもや下がったということ、水無月朔の馬子繋ぎの話などを聞いた。馬子繋ぎ行事は緩く搗いた米粉を口に塗った藁の馬を水辺まで持って行って繋ぐしきたりなのだが、最近は馬を作らず、摺り物で済ませる家も多くなったということだった。作る余裕がないのかと問うたが、寧ろ手間の問題だろうと乙蔵は言った。

「藁あ縋つて馬拵えるのは面倒臭え。巧く作れぬ者も居るし時も掛がる。摺り物なら手間要らずだ」

「摺り物というのは何だ。馬の絵でも刷られているのか」

「そりやそんだ。藁と同じに口ん処に糝は塗るようだが、そんなのは大した手間ではね。後は水口まで持つてけば、終わりだ。簡単だべ」

「お札のようなものなのか。何処で刷っているのだ」

各戸でいちいち版木を彫るのなら、余計に手間だろう。

それは知らねと乙蔵は答えた。

「寺か神社で刷つてんだべな。無料で配んのか、買うのかは判らね。今度尋いておく」

つまり出費を惜しんだ結果ではなく、手間を惜しんだ結果ということだろうか。しきたり通りに遂行する暇はないのだが、しきたりを止めてしまうことも出来ない。だから簡便簡略に変更する——そうした傾向は最近顕著に見られるように祥五郎は思う。

下下の暮らし向きを把握するためには、このような些事を知っておくことが肝要なのだ。変化は、先ず細かいところから出る。

鍋倉の殿様は、豪胆な立ち居振る舞いとは裏腹に逆も繊細な御仁なのである。

毅然とした態度は、若輩として軽視されなかったための方便でもあるのだろう。

手間賃を渡して立ち上がると、袖を引かれて寸暇待てと言われた。

「何だ。不足はあるまい」

「不足はねけど。そう急ぐな。まだ言うことがあんだ」

あの絵のことだと乙蔵は言った。

「絵——とは何だ」

「言つてたべ。常堅寺か何処かで見かけだて」

「ああ。あの板絵か」

奇妙な絵だった。

板に描かれた極彩色の絵だった。高級な調度が設えられた座敷の真ん中に、上等の紋付き姿の若い男が座っているのである。膳の上には山海の珍味がこれでもかという程に並べられている。富貴な家の御曹司としか思えない。

最初は大振りの奉納絵馬かと思つた。

しかしそんな訳はないのだ。願掛けの絵柄とは思えない。貧乏人が金持ちになりたくて願を掛けたとでも考えなければ納得が行かない。しかし、そんな願いを寺が——否、仏が聞き届けてくれる訳もないし、況て貧しき者に奉納出来るような代物ではない。自分で描いたとは思えぬし、絵師に頼んだのなら相当な金を支払っている筈だ。

祥五郎はそれを姉の月命日の墓参の際に見たのだ。

生憎、住持は留守で、それが何かは判らなかつた。

流行るかもしれない乙蔵は言つた。

「流行るといふのは解らん。あれは何なのだ」

「浄土絵だそうだ」

「何だと」

何処が浄土だというのか。

「阿弥陀様も天人も、宝樓も宝閣も描かれていなかったぞ。あんな浄土があるか。何かの間違ひではないのか。儂が見たのは、ただの商家の奥座敷の絵だ。まあ、かなり裕福な家の絵のようではあつたがな」

「相当の長者の屋敷なんだべな。お前が見たのは、多分、去年の暮れに死んだ、長者の息子の肖像絵だわ」

「死んだ——というと」

「だがら死んだ者の絵よ。似せ絵とでもいうのだから。いいが、祥五郎。この辺りじゃあ死んだ者はお山に行ぐとか、極楽さ行ぐとか、そんな風に謂うし、そんだ風に教えられもすんだがな、皆、そう思つてはねえのでねがな。死んだ後も現世と同じように暮らしていると思つとるよ、皆。なら、裕福な方がいいべ」

「つまり」

死後の富貴を祈願しているのか。

「死んだ後も、御馳走喰て綺麗な衣裳着て立派な御殿で暮らして欲しいと思うべ。それを絵にして奉納すんだ」

「なる程な。それで浄土絵なのか」

正式な呼び方はねえと乙蔵は言う。

「昔からあるもんではね。この頃の流行り物だ。誰が始めたもんかは判らねども、描いた奴は判つた」

「誰だ」

「あのな、去年から山口の壇^{だんのはな}の裏手に小屋あ建てで住んでる、仲蔵^{なかぞう}つて男だ」
「聞かぬ名だな」

「そらそうだべ。別に看板出しとる訳ではね。あれは口伝てに聞いて、知った者が頼みに行くんだ。浄土絵は、ま、そいづが考案したのかどうかは知らねどもな、その男、頼めば何でも描ぐそうだが。上手に描ぐと評判だと聞ぐわ」

「絵師なのかな」

「さで。絵だけでなぐ拵え物なら何でもするど聞いてるがな。権現様の頭でも仏像様でも、碗でも膳でも器用に拵えるそんだ。木匠もするみでえだし修繕でも何でもする。器用なんだべ」

「それは」

何者だ。

「土地の者ではね」

「盛岡からでも来たのか」

「そうではねえ。津軽から流れて来たてことだが、その前は飛驒に暫く居ったようだ。本当かどうか知らね。確かめようもねべ。元は江戸者だという噂だがな。会ったことはね」

「江戸者なのか」

どんな男なのか。興味が涌いた。

「塗り物さ頼んだて奴が居たつて、それに聞いたんだが、言葉が江戸弁なのだそうだわ。齢は五十か六十か、若くはねえが、能く判らねそうだ。何でも、化け物みでえなご面相の大男だと聞いたな。面相えでどうこう言いだぐはねが、まあ、只者ではねべ」

お前の咄は化け物ばかりだなと言うと、乙蔵は遠野は化け物が集まんだと答えた。

「西がら東がら、遠方がらも、人も物も来るべ。咄だつて、なんぼでも来る。珍す咄も怪しげな咄もあるわ。それが溜まるんだべな」

「咄が溜まるか」

「溜まるだけではねのさ。百姓は百姓、猟師は猟師、商人は商人、武家は武家で、同ず咄を別に聞ぐ。それを伝える。だがら化け物も増えるのよ」

「なる程な」

それは解る気がする。

遠野保は盛岡藩の領地だが、盆地という土地柄からか、それとも遠野南部家が独自の裁量を任されているからか、他の盛岡領とは何処か違っている。祥五郎は藩の中に別の藩があるような、そんな印象を持っていたのだが、乙蔵のいうように様様な国と交易があり、また狭い場所に様様な階層の者が暮らしている所為で、雑多な習俗文化が緬い交ぜになり独特の国柄が醸成されたということなのかもしれない。

仲蔵なる男の住まいの場所を再度確認し、追加の手間賃を渡して、乙蔵と別れた。

空は相変わらず真つ青だったが、それ程暖かくはない。

乙蔵の言っていた通り、今年の作物の出来は余り良くないのかもしれない。

祥五郎は何処に向ったものか、やや迷った。

噺^{はなし}

その時、大久保平十郎^{へいじゅうろう}は苛^{いら}ついていた。分家筋^{ぶんけしん}とはいふものの、己^じは遠野南部家老の縁続きである。徒^{いたずら}に愚弄^{ぐろう}され蔑^{さげす}まれる覚えはない。

腰抜けだの臆病^{おくびょうもの}者^{もの}だのと誹^{そし}られ囃^{はや}されるような行いはしていない。

そもそも、暗がりに女がいたとして、それを見掛けただけで恐れて逃げただとか、氣を失ったとかいふのであれば、それは武士だろうと町人だろうと、腰抜けで臆病者^{おくびょうもの}だろう。

平十郎はそんな態度を執^とつてはいない。

微^{うすく}暝^{めい}い林の中に見馴^{みな}れぬものが見えたので近付き、正体を確かめようとしたのだ。女だと知れたから声を掛けた。明らかに怪訝^{おか}しかつたからである。

どう観ても婚礼衣裳^{いしょう}だったのだ。

真に肝の細い者ならば近付くこともしないだろう。女ものの着物を目にしたならば、それ山女^{やまを}だやれキ、ヤ、だと騒いで逃げるに違いない。少なくとも平十郎は違う。

平十郎は勘定吟味方改役^{ざんぎんかたあためやく}である。町廻^{まちまわ}りはお役目の内ではない。縦^{たて}んば怪しい者を見掛けたとして、放^{はな}つておいたとしても責められる筋合いはない。

それでも、平十郎は見過^みごすことが出来なかったのだ。

元来^{もとより}そうした性質^{しやうしやう}なのである。

だから平十郎はわざわざ林に踏み込んで、声まで掛けたのだ。それを人と思えばこそ、女と見て取ったからこそ、何があつたのか案じたのである。

平素人の居る筈^{はず}のない場所、普段人の居る筈^{はず}のない刻限に居る者は、人ではないモノと判ずるが、下下の常である。

しかしそんなことはない和平十郎は思う。

深山幽谷に女が居る訳はない、だから山女^{やまを}だと人は謂^いう。

深夜未明に童^{こども}が居る訳はない、だから狐狸^{きり}だと人は謂^いう。

だがしかし。

居るかもしれないではないか。

椿事^{ちんじ}変事は如何^{いか}なる時も、誰の身にも起きる。

男に行ける処^{ところ}なら、女にだって行けるだろう。

行く理由がないだけだ。行く理由さえあれば行けぬ訳ではないのである。そんな場所、そんな刻限に居たのであれば、居ただけの理由があるのだろう。ならばその理由こそが尋常ならざる状況の因である筈だ。